H29地域協働研究（ステージⅠ）

H29-Ⅰ-01「史跡や文化財の国際化対応」

課題提案者：盛岡市教育委員会
研究代表者：盛岡短期大学部　松本博明
研究チーム員：熊本早苗、小川春美、パトリック・マーハー（盛岡短期大学部）、今野公顕（盛岡市教育委員会）

＜要　旨＞

日本人と言語や文化の異なる外国人に，我が国の歴史文化の魅力を分かりやすく伝えるには，既存の日本語パンフレットを翻訳するだけではなく，グローバルスタンダードな歴史教養に，日本史や盛岡市の歴史・文化財の価値を落とし込み，解説する必要がある。これは，文化庁「文化財の英語解説の在り方について」（平成28年７月）報告に明らかである。

日本史に明るくなく，文化受容経験の異なる外国人に対し，歴史的な価値を伝えるためには，我が国の歴史や文化の背景を理解するための前提となる基本的情報を外国語で解説しなければならない。このためには，外国人が求める我が国の歴史を知る上での常識的な情報は何か，それを理解するためにどのような説明が必要かを明確に整理することが求められる。また併せて，外国人が我が国の歴史や文化財を目の当たりにした際に，何を知りたいのか，何に魅力を感じ，興味を持つのか，を理解したうえで，私たちにとっては当たり前の事象でも，鑑賞時の経験値、視点が異なることに留意した解説をする必要がある。

これらの視点を整理，分析し，従来のように漫然と歴史・文化を「直訳的」に紹介するのではなく，より関心を深めていただける解説方法の研究・獲得が必要である。本調査は，外国人へのアンケート等を通じて，ニーズに実態を把握しながら，その手法を獲得することを目指した。

１　研究の概要（背景・目的等）

盛岡市内には近世城郭である盛岡城跡や古代城柵志波城跡、縄文時代の集落「大館町遺跡」、中世戦国期の城館「安倍館遺跡（栗谷川古城跡）」などの史跡のほか、「旧盛岡銀行本店本館」（岩手銀行中の橋支店赤レンガ館）などの建造物、「石割桜」や「枝垂れカツラ」などの天然記念物、旧南部氏別邸庭園・「南昌荘庭園」などの名勝、「さんさ踊り」や神楽、剣舞などの郷土民俗芸能など、多種多様な文化財が豊富に所在する。

外国人観光客・インバウンド観光促進の必要性が叫ばれているが、盛岡の観光対象となる文化財に対して、外国人に対する統一した検討がなされていないのが現実である。各博物館施設等における多言語化もバラバラで、統一した取組みがされていない。

こうした各施設での取り組みを主導する、共通した思想やツールを獲得することで、国際化にともなう地域文化・歴史の発信力を身につけなければ、今後激化するであろう地域間競争においても、生き残ることができない。文化財保護法において、文化財とは国民共有の財産であり、保存しかつその活用を図り、国民の文化的向上に資するとともに世界文化の進歩に貢献するもの、と規定されている。外国から訪れる方々の視座や評価基準を受けいれつつ、盛岡が資源として有する文化資産を、不変的な価値を有する日本資産としての価値を向上することは、地域の国際化、世界レベルの地域価値の向上と発信力獲得のために、必要かつ重要な課題と考える。

ILC誘致や2020年東京オリンピックを見据え、岩手県内市町村、とりわけ県都である盛岡市では、歴史や文化財を活用した地域振興につなげるために、盛岡を訪れる外国人に対して、その価値や魅力を伝える方策の研究、実践が急務である。

言語や文化の異なる外国人に、地域の歴史・文化に裏付けられた魅力を伝えるためには、既存の日本語パンフレットを「翻訳」するのではなく、来訪する外国人が持っているグローバルスタンダードな歴史的な知識や知見に、日本史や盛岡市の歴史・文化財の価値を落とし込んで解説、地域の文化財を基底から理解してもらう必要がある。本研究はそのための手法を開発するものである。

２　研究の内容（方法・経過等）

【方法】

盛岡市教育委員会では、文化財の活用促進と、観光と地域の振興の一環として、史跡志波城跡や東北古代史を中心としたストーリーを対象として、文化庁「日本遺産」への認定を目指す取組を行っている。

文化庁「日本遺産」事業は、我が国の歴史を物語る魅力的な地域の歴史遺産を、地方創生・観光振興に役立てる取組で、特にも2020年東京オリンピックに向け外国人観光客に対し、我が国の魅力を伝えるものとされている。

このためにも、外国人向けのガイドツール（パンフレットや解説板、ガイドのマニュアル）を作成するに当たっては、ILC誘致や2020年東京オリンピックを見据え、訪問する外国人に対して、アンケート調査などを通じて外国人のニーズを把握しながら、歴史や文化を伝える方策を模索し、地域の国際化にかかわる方向性を見定める。

【経過】

上記課題解決のためには、盛岡市の通史や数多くの文化財を対象に研究する必要がある。それには多くの知識と、時間と労力が必要となることが見込まれるため、本年度については、盛岡市が、文化庁「日本遺産」認定を推進している国史跡「志波城跡」と当該文化財に関わる東北古代史をモデルケースとして選び、研究に取組んだ。

まずは、現状の把握が第一であったことから、東北地方に現存し、現在公開されている紫波城と傾向が類似している文化財、資源の外国語解説の現状を調査把握した。各施設に協力を仰ぎ、現在のパンフレットならびに英文パンフレットの有無を把握した。

その後、在留外国人３名の協力を仰いで、実地調査を実施、教育的な側面を付加させるために学生を参加させて、学生による英語による案内を実施した。

実施に先立って、紫波城の基礎的な知識を学生に獲得させるために、共同研究者であり紫波城の専門家である今野公顕氏（盛岡市教育委員会）が学生を対象に事前勉強会を行ない、その上で「外国人観光客に岩手の歴史文化を英語で伝える IN 紫波城古代公園」を実施した。

参加者は、折からの降雪・積雪で、外国人３名、学生４名であったが、充実した内容であった。

実地体験会のあと、参加くださった外国人の方に、以下のようなアンケートを配布して、回答していただいた。

アンケート内容
1　いままで紫波城古代公園を訪れたことがありますか。
2　訪れたことがある方に伺います。訪れたときガイドの方の説明を受けましたか。
3　それは英語でしたか。
4　ガイドの説明内容はよく理解できましたか。
5　どういう点がよく理解できましたか。具体的にお書きください。
6　どういう点がよく理解できませんでしたか。またどういう点に気をつければよいと思いますか。具体的にお書きください。
7　今回紫波城古代公園を訪れてみて、何を感じましたか。
8　この地域の古代の歴史について理解できましたか。
9　どのようなことが理解できましたか。またどのようなことが理解できませんでしたか。具体的にお教えください。
10　本日の見聞で、皆さんがもっとも興味深かったものは何ですか。
11　皆さんのお立場から、この公園が外国の方によりいっそう興味をもたれるためには、何をどのように説明したらよいでしょうか。本日の体験から気付いたことをお教えください。
12　この公園に足りないものは何でしょうか。
13　母国はどこですか。

３　これまで得られた研究の成果

アンケートの回答内容が、現在の紫波城の状況を如実に物語っていると思われるので、それを転記しながら分析しておこう。（原文は英語）

問・紫波城や東北の古代史について理解できたか。

参加者全員が「ある程度理解できた」と回答したが、理解の具体内容を回答する欄では

「その時代は、だれが英雄で、何を成し遂げようとしていたのか理解できた。でも、この史跡への興味を喚起するだけのことがある業績だったのかどうか自分が判断できるほどは理解できていない。」

「その当時の東北は中心地から遠い未開の地であり、独特の役割を果たしていたことが理解できた。北海道のアイヌが東北から来た人たちとは知らなかった。アイヌのことは知られているのに、なぜ東北の蝦夷は知られていないのか不思議だ。」

「最初は登場人物たちの関係と誰が誰を攻撃しているのか分からなかった。」

というように、かなり立ち入った歴史の詳細な内容について興味を持っていることが明らかになった。

つまり、説明者側も単に英語が達者であるだけではだめで、こうした歴史についての詳しい内容を、聞く側の知識の水準にあわせて解説する取り組みが必要であることが改めて浮き彫りになった。また、

問・紫波城古代公園が、外国人に興味を持ってもらうにはどうしたらよいか。

という質問に対しては、「史跡の施設のスタッフの方がほとんどといっていいほど英語の知識がないのに驚いた。公共の施設なのだから基本的な英語力を有するべきだと思う。ただその辺に翻訳が書いてあればいいというわけではない。質問に答えられる人材が必要だ。城壁のところはもっと工夫が必要だ。ツアーの中心になるところが狭い。ツアーの見所は城壁とそれをくぐったところに思えるが、あまり目玉になるようなものがあるとは思えない。竪穴建物や調理場のところをもっと工夫して、城壁の中での生活がどのようなものだったのかわかるようにするといいかもしれない。」

「日本の歴史について誰もが理解があるわけではない。その当時の歴史や、この史跡がどうかかわっているかなどを示す表や図があるといい。平安時代の知識がない外国人だと、わからないかもしれない。」

「10年以上も前に藤原の里を訪れたが、当時の衣装を着たマネキンや飾り、家具などがあり、活気が感じられた。（略）当時の様子を再現するように作られているようには感じなかった。」

といったように、紫波城古代公園が施設としていっそう魅力的な発信をするべき（宣伝発信と体験などの実施）であるという趣旨の答えが多かった。

こうした提言は、本調査研究を始めるきっかけとなった問題意識と、基盤を共有しており、本研究のほう光栄の正しさを、外国人の方々が実証してくれた形になった。

４　今後の具体的な展開

研究費決定交付から半年程度の研究期間しかなかったために研究時間が限られたことで、十分な調査ができなかったが、今後は、実地調査を積み上げることでニーズを正確に把握し、それに基づいてガイド用の英語パンフレットの施策、ガイドの内容についての解説書などの施策を試みていくことになろう。

５　その他（参考文献・謝辞等）

本研究に協力していただいた関係諸氏に感謝をしたい。特に、積雪の中体験会に参加してアンケートにお答えくださったKen Asano、Kathryn Akasaka、Mary Burkittの３氏には心より謝辞をささげたい。